

第647回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2022年10月度 ——

◇ 開催日

2022年10月17日(月)

◇ 議題

<ラジオ番組>

「約束～マエストロ佐渡裕と育徳館管弦楽部 奇跡の4年」

(放送日：5月16日(月) 21:00～21:55)

◇ その他

「2022年度上期の番組種別の公表報告」

九州朝日放送株式会社

第647回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2022年10月17日(月)午後3時30分～4時35分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 7名

副委員長 石橋 和幸

委員 石井 靖子

委員 中山 裕二

委員 丸石 伸一

委員 田川 真司

委員 上野 恵梨奈

委員 山根 久資

欠席委員数 1名（意見等は事前に提出）

委員 藤村 まこと

放送事業者側出席者名

代表取締役社長 和氣 靖

執行役員 総合編成局長 木附 ゆかり

執行役員 報道情報局長 柴田 高宏

報道情報局 解説委員長（プロデューサー） 臼井 賢一郎

総合編成局 ラジオ担当部長 原 由美子

総合編成局 総合編成部（ディレクター） 豊増 和彦

番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長 園田 哲也

番組審議会事務局（視聴者・広報室） 松永 俊郎

4. 議題

- (1) ラジオ番組 「約束～マエストロ佐渡裕と育徳館管弦楽部 奇跡の4年」
放送日：5月16日（月）21：00～21：55
- (2) 2022年度上期の番組種別の公表報告
- (3) 10月・11月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (4) 9月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (5) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- 世界的に有名な指揮者の佐渡裕さんが地方の高校の吹奏楽部で指導にあたるという普通では考えられないような交流があったことに驚いた。また、交流の過程を時系列で取材し、軌跡を番組化した内容は素晴らしかった。いつから、どのような経緯で取材を始めたのか関心が湧いた。
- 最初は「日本の世の中はティーンエイジャーが動かす」という佐渡さんの言葉に少し軽い印象を抱いたが、何度もその言葉が繰り返されるうちに、高校生たちが感動を届けられるということを信じるようになり、自信を持つ様子から情熱が持つ力を再認識した。
- 情熱を持ったリーダーや大人がいると周りは動かされるのだと感じた。自分の仕事の場面などにも置き換えて、意識やプロセスの面で色々なことを学ぶ機会となった。
- コロナ禍で予定していた演奏ができなくなるなど、思いどおりにならないことが多かった高校生たちに対し、佐渡さんの「頑張れないときは頑張らなくてもいい」という言葉が心に刺さった。コロナ禍で同じように頑張っていたのにそれを披露する場を失ったという中学生や高校生は大勢いると思うので「また頑張れるときが来る」というメッセージにも聞こえた。
- ナレーションやインタビューがとても効果的に使われていた。演奏はあまり引っぱり過ぎると飽きが出るが、物語の途中にバランスよく配置して構成されていた。
- 番組が進むにつれて演奏自体も聞いてみたくなる進行だったので、じっと耳を澄まして音に集中するラジオがテーマに合っていた。

などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 世界的な指揮者から指導を受ければ演奏は一瞬でがらりと変わったはずだが、そうした瞬間が表現されておらず残念だった。
- 演奏会を終えた佐渡さんが「僕が出した注文、すべてを実現してくれた」と語っていたが、どんな注文があり、生徒がどう応えたのかが描かれていなかった。ティーンエイジャーの成長の過程を一つでも紹介できれば、より良い番組になったと思う。

- 高校生が提案したベートーベン「第九」が開けなかったのは残念だったが、長期間の取材で膨大な資料が集まるなかで、何を主軸に据えるかという点で取捨選択が不十分だった気がする。全体像は分かるが伝わるものが少なくなる気がした。
- ラジオでは表情や練習風景が見えず、どんな所で何人ぐらいが集まって、どれくらい長い時間練習しているのかが分かりづらく感情移入しにくかった。
- ラジオは「ながら聴き」が主流。本作ほど膨大なコメントや登場人物が出てくるとなればラジオでは物語についていけないという気がした。テレビで見たいと思った。
- コンサートの条件に「行橋の町を活性化させること」があったが、最後のコンサートではその要素が抜けていた。コロナ禍で難しい面もあったろうが、もう少し地域の人の声も入れれば良かったのではないかな。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- 取材のきっかけは系列局からの情報提供。別の講演で行橋市を訪れた佐渡さんを育徳館高校管弦楽部が演奏で出迎え、熱意ある演奏に心を打たれた佐渡さんが指導したことがきっかけ。一度きりのつもりだったが、熱血漢の佐渡さんに火が付き交流が続けられた。
- 当初は「日本の世の中はティーンエイジャーが動かす」との言葉は大きすぎるという印象を受けた。しかし、取材を進めるうちに、ティーンエイジャーという大事な時期にどれだけの刺激を受けて大人へと成長していくのかということを描くことが大切だと考えた。
- ティーンエイジャーがわずか3年の高校生活を送っていたさなかに発生した新型コロナ。高校生として演奏する機会が次々と奪われる中で「奇跡のコンサート」というイベントの帰結よりも、「人間が生きる意味」など普遍的なテーマに焦点を当てることにした。
- 高校生の演奏が一番変わったのは本番前の集中練習の時。高校生の生き生きとした様子ばかりを描き、明らかな違いを感じたものの、劇的な変化を描けなかったのは反省点だ。
- 目を閉じて、じっくりと聴いてもらうことにより、リスナーのイマジネーションに訴えかけたいという考えでラジオ番組として制作に当たった。ラジオの取材は(カメラが無いため)取材対象者の本音を引き出しやすい特性もある。
- 佐渡さんは「奇跡のコンサート」での反応を踏まえ、ぜひ「第九」も演奏したいと語っている。継続して取材にあたり、結実の様子はテレビでもお届けしたいと考えている。

などの説明をしました。